

## 「しんかい6500」による南海付加体内部の地質構造と流体移動

## Geologic structures and fluid flow of the Nankai accretionary prism along the Shionomisaki and Tenryu submarine canyons

# 小川 勇二郎 [1]; 川村 喜一郎 [2]; 安間 了 [3]; YK05-08 Leg2 乗船研究者 [4]

# Yujiro Ogawa[1]; Kiichiro Kawamura[2]; Ryo Anma[3]; Shipboard Scientific Party YK05-08 Leg2[4]

[1] 筑波大・地球進化; [2] 深田研; [3] 筑波大・生命環境; [4] -

[1] Earth Evolution Sciences, Univ. Tsukuba; [2] FGI; [3] Life-Environment, Tsukuba Univ.; [4] -

2005年6月20日&#12316;7月8日のJAMSTEC, YK05-08 Leg 2 航海によって、南海トラフの内部構造と流体移動を知る目的で、2つの海底谷（潮岬海底谷（3ダイブ）、天竜海底谷（7ダイブ））に沿う組織的な潜水調査が「しんかい6500」によって行われた。以前に我々のチームで行われた「しんかい6500」と「かいこう」による4ダイブとを合わせ、合計14ダイブの成果を総合的に検討した。その結果、陸側斜面の海底面からの従来の報告による諸様相との相違が明らかになった。二つの海底谷は1km近い比高を持ち、海底谷両岸の急崖に大規模に露出する現世付加体の地質構造を直接観察することができる。潜航調査による地質構造の観察結果の要点は以下の通りである。1) 南海付加体は、大構造的には水平ないし南傾斜のタービダイト層からなり、褶曲と断層（正、逆）が発達し、付加に伴う構造発達が顕著である。2) 小構造は液状化、破断、劈開、鉱物または粘土脈などが顕著で、所々に炭酸塩セメントが見られる。3) 化学合成生物群集は付加体の表面（一般の海底面）とは様相を異にしており、新種も見られる。4) 炭酸塩鉱物脈は表面からのものと異なり、より温度が高い。5) OOSTと考えられる低角スラストの東海スラストから千枚岩質の岩石が採集され、イライト結晶度からかなりの高温（260度）をこわったものと判定された。

（YK05-08 Leg 2 乗船研究者ほか：（横山俊治（高知大学）、川上俊介（産総研）、Yildirim Dilek（マイアミ大学）、Gregory F. Moore（ハワイ大学）、林謙一郎（筑波大学）、八木勇治（筑波大学）、佐々木智弘（東京大学）、土岐知和（東京大学）、遠藤良太（筑波大学）、山口飛鳥（東京大学）、太田哲平（筑波大学）、佐野守（日本海洋事業）、平野聡（JAMSTEC；陸上研究者）、原英俊（産業技術総合研究所；陸上研究者））